研究論文

農村空間の構造と特性に関する研究

—茨城県における地域特性—

藤井 英二郎* ・ 細田 和 寿**

Studies on the structure and characteristics of rural spaces
—The regional characteristics in Ibaraki Prefecture, Japan—

Eijiro FUJII*, Kazutoshi HOSODA**

摘要: 茨城県の水田、畑作、海岸集落で農村空間を比較し、地域特性を考察した。道路や敷地の形、屋敷囲い、屋敷入口の位置と構造、庭には立地や生業を反映した心理・社会的特徴が表われていた。水田集落は他より屋敷囲いが類似し閉鎖的であり、門を構える意識があった。これは稲作の共同作業や、安定し成熟した稲作体系の上に成立した形式的社会の反映と考えられた。海岸集落は道路や敷地が不規則で土地への執着が少なくと考えられた。

1. はじめに

日本の農村の外部空間に関する研究は、藤井・細田(1983)¹⁾が指摘しているように数少ない。したがって、農村空間を考える意味について触れておく必要があるだろう。ここでいう農村空間は、農村生態系を構成する集落、耕地、林地、水域、道などの土地利用を農村生活を中心において3次元的な環境としてとらえようとした言葉である。農村環境とせずに農村空間とするのは、要素の単なる集合体ではなく、要素が農村生活の器としての空間を形づくっているという考え方をより明確に表現したいためである。

農村空間を扱う意味は、大別して物理・生態的側面と心理・社会的側面から考えられる。物理・生態的観点からは、農村空間に次のような特徴があると考えられ、これらの解析は空間の造成、管理に多くの技術的提言を提供するものとする。1) 人工的空間が優占した都市に対して自然的空間が優占している。2) 労働、居住、レクリエーションなどの行為が空間的に分離されがちな都市に対して、農村は機能が複合、あるいは隣接する空間である。3) 漸移空間が排除され空間が不連続的に接する都市に対して、農村では空間が連続的に変化する。4) 開放的な都市生態系に対して農村は閉鎖的生態系である。以下の報告は主に心理・社会的考察であるので、詳しくは稿を改めて報告する。

農村空間を扱う心理・社会的意味は、都市空間と対照

して次のことが考えられる。

一般的に都市は農村に比べて歴史が浅い。しかも、その構成員は移動性が高く、流動的である。社会的流動性は空間にも影響が及ぶために、都市は空間的にも流動的で変動の多い場ということができよう。これに対して農村は長い歴史をもつと同時にその構成員の変動も少ない。したがって、そこでは家族、あるいは社会と空間との間に成熟し安定した関係がつけられていると考えられる。安息感や快適性といった価値尺度をもつために、ややもすれば表面的、一時的な現象や評価を一般性のある、恒常的なものと解釈する恐れのある造園分野では、この人間と空間との安定した関係は、人間と空間との心理的結びつきを求める上で極めて重要なポイントである。

また、多様で流動的な人間から成る都市では、地域社会的通念とか暗黙の了解といった共通理解、基本的前提が育ちにくい。「都市の根無し草」などはこれを端的に表現している。これに対して、農村にはそれがあると考えられる。地域の暗黙の了解はしぐさや付き合いなどに限定されるものではなく、空間的にも「あるべき姿」(意識的なものとは限らない)があるはずである。長い歴史を経てつくり上げられた地域共有の暗黙の空間的了解事項である。これは、安定した地域社会を支える空間装置として再評価すべき対象と考える。

都市社会では、空間との安定した関係や地域内の暗黙の了解といったものが育ちにくいためにとめどもなく拡

* 千葉大学園芸学部 Fac. of Hort., Chiba Univ., Matsudo, Chiba 271.

** 焼津市役所 Yaizu City Office, Yaizu, Shizuoka 425.

大できるともいえる。しかし、事實はむしろ逆で、経済的生産性の追求が都市を急激に膨張させ、社会的、空間的醸成を許さないであろう。したがって、都市では社会的、空間的に安定した地域社会の適正規模を明らかにすることは難しい。地域社会の最小規模というものがあるとすれば、農村では、それが拡大してゆく過程で内部分割が起り（例えば、いくつかの小字から成る集落がそれに相当するかも知れない）、さらに拡大して社会的、空間的な暗黙の了解を共有することができずに単なる集合的社会になってゆく過程を追うことができ、地域社会の最大規模を明らかにすることも可能であろう。もし、最大規模がないとすれば、心理・社会的に安定した地域社会を単位とした大集落を維持する技術を探ることも可能であろう。

以上が今ここで農村空間を研究する動機であり、またこれらを具体的に明らかにすることが「農村空間の構造と特性に関する研究」の主な目的である。この考えのもとに、藤井・細田(1983)⁴⁾では都市化程度の異なる列状集落を対象に、それらの空間的差異を心理・社会的側面から考察し、農村空間の特性をつかもうとした。

ここでは立地条件や生業の異なる水田、畑作、海岸集落において、それらの空間的差異を心理・社会的側面から考察したい。これらの集落を選んだ理由は、日本の代表的集落タイプであることの他に、次の理由もある。藤井(1981)²⁾で東関東の農業システムと平地林との関係を調べた結果、水田地帯と畑作地帯では農村生態系やその都市化、近代化の過程が明確に異なっていることがわかり、それらを空間構造的に把握することが環境計画に重要であると考えたことが第1である。第2は、日本文化は稲作起源といわれるが、稲作という生業とそれを可能にする立地条件が生活空間の形成、その背後にある意識にどう影響したかという日本空間論の基本に係わる問題を解く糸口になると考えたことである。そのためには、畑作集落や海岸集落との比較が不可欠である。

2. 方 法

立地条件や生業の異なる地域間で農村空間を比較する場合、まず統計的方法が考えられる。しかし、それにはかなりの数の集落を調べる必要があり、集落空間の詳細なデータを得るためには相当の労力や日数がかかることを考え合わせると現時点では困難なことである。そこで、ここでは対象を茨城県内にしぼり、水田、畑作、海岸集落を各々1、2ヶ所ずつ選んだ。この方法では調査集落の特異的現象を生業間の違いと解釈する危険性がある。これを避けるために、これまでの調査結果（藤井、1982³⁾、藤井・細田、1983⁴⁾）との照合や各集落の歴史的背景との関連性などを含めて考察を進めた。

茨城県は、首都圏では最も都市化が遅れ、民俗学の豊

表1 調査集落の農林地面積

単位：a

	水 田	畑	樹園地	山 林
居 合	6,469	1,017	—	3,689
大 形	7,931	801	1,129	?
栗 山	1,736	4,271	—	1,375
埴	1,568	2,927	302	3,104
角 折	3,565	4,624	10	1,551

注) 1980年世界農林業センサスより作成

図1 調査集落の位置

庫といわれるほどに伝統的習慣がよく残っている。調査集落は水田集落として大野村居合、筑波町大形、畑作集落として八千代町栗山、大野村埴、海岸集落として大野村角折である（図1、表1～3）。大野村の居合、埴、角折は鹿島地方の3つの異なる立地である北浦沿いの低地、鹿島台地、鹿島灘に面した海岸にそれぞれ位置し、20年ほど前までは純農村であったが、1961年に始まった鹿島工業開発（3集落とも工業地帯から約10km離れている）の影響を受けて兼業化が進んでいる（藤井・柴田、1981¹⁾；藤井、1981²⁾）。大形は、筑波山の西方を南下し霞ヶ浦に流れ込んでいる桜川沿いの低地にあり、居合に比べて住宅密度は高い。栗山は、東北本線と常磐線のいずれからとも遠い位置にあり、茨城県で最も盛んな畑作地帯のひとつである。したがって、埴よりも純農村的である。海岸集落がひとつしか調べられていないのは、角折の調査には後述するように多くの時間を要したこと、鹿島灘沿いの集落がいずれも類似していたためである。

調査項目は、道の配置、屋敷配置、各屋敷の建物配置、

表2 調査集落の作物類別収穫面積

単位：a

	稲	麦類	雑穀	いも類	まめ類	工作 芸物	野菜	花卉	飼料 作物	その他	合計	耕地 面積	耕地 利用率
居合	6,380	—	—	7	38	—	151	—	—	—	6,576	7,486	0.88
大形	7,555	177	22	11	51	—	178	—	2	16	8,012	9,861	0.81
栗山	1,854	—	76	38	35	117	6,234	—	—	—	8,226	6,007	1.37
塙	2,052	90	6	90	172	1,568	474	—	—	—	4,452	4,797	0.93
角折	3,344	—	6	1147	102	166	2,114	379	—	—	7,258	8,199	0.89

注) 1980年世界農林業センサスより作成

表3 調査集落の専業、兼業別農家戸数

単位：戸、但し下段は%

	専業	1種 兼業	2種 兼業	総農 家戸 数	全戸数	農家率
居合	2	5	79	86	168	51.2
	2.3	5.8	91.9	100.0		
大形	1	30	78	109	153	71.2
	0.9	27.5	71.6	100.0		
栗山	26	16	18	60	89	67.4
	43.3	26.7	30.0	100.0		
塙	1	18	31	50	179	27.9
	2.1	36.0	62.0	100.0		
角折	16	13	63	92	232	39.7
	17.4	14.1	68.5	100.0		

注) 1980年世界農林業センサス、同年国勢調査より作成

屋敷囲い、屋敷入口、庭などである。これらは航空写真で概略をつかみ、現地ですべて1戸ごとに図面に記録していった。庭は、細部に至ると千差万別であるが、植栽位置や空間区分などには類似性がみられた。したがって、ここではそれらの類似性に着目し、集落ごとに代表的な庭を数例だけ調査した。庭の構成と構造の詳細は改めて報告したい。

3. 居 合

この集落の水田は基盤目状に区画整理されており、「一の田」、「二の田」などの坪名もあることから奈良時代の条里制跡といわれている。集落形成は室町末期から天正19年の鹿行33館滅亡のころといわれ、江戸時代は旗本の知行地であった。北浦沿岸にあるためかつては漁業や舟運業を兼業とするものも多かったが、現在の兼業先は主として鹿島工業地帯になっている（大野村史編纂委員会、1979²⁾）。いずれにしても水田中心の集落である。

しかし、現在その経営は消極的で、収穫面積はほとんどの作物で減少傾向にある。特に麦、工芸作物、野菜などの減少が著しい。これは、農村でありながら米を除いて副食は購入する形の消費生活が浸透しつつあることを示している。

集落は1～3mの等高線上にあり、北浦の湖岸に堤防のできる約10年前までは、利根川の増水によって北浦の水位が上がり度々水害に悩まされていた。敷地は盛土されて水田から約1m高くなっている（図2）。

屋敷は南北に走る道路の両側に並び、列状集落に近い配置である。大きい敷地で、主屋正面南側に屋敷入口がある場合の建物配置は、主屋を北側中央部に寄せ南東、南西に物置や倉を配したU字型が多い。これより敷地が小さく、東か西に屋敷入口がある場合は、主屋の位置は上記の型と変わらないが、屋敷入口側の物置や倉が主屋正面南側にまわり、東か西に開いたU字型になっている例が多い。いずれの場合も主屋の南庭は広くあけた形である。さらに住宅密度が増し、敷地の南北巾が狭くなると、図2の南隅の神社の北隣りのように、主屋を道路側に寄せその横に物置などを順次配した直列型をとるものと考えられる。したがって、南北に延びた列状集落において、東か西に開いたU字型配置は、南に開いたU字型と直列型の中間型と考えられる。

屋敷林は、敷地の大きい家の北、東、西の敷地境にみられる。その構成は、上層（8～15m）にケヤキ、スダジイ、タブノキ、スギ、クロマツ（マツノザイセンチュウでほとんど枯死）、下層にマダケ、ヤブツバキが多い。生垣はほとんどイヌマキで、地元ではマキ塀と呼んでいる。西南側の集落では数年前道路が拡幅されて、マキ塀からブロック塀に変わっている。マキ塀は高さ約2m、ブロック塀は約1.8mでどの家もほとんど同じであり、道路から屋敷内は見えない。マキ塀の管理は大変だと言いながら、どこの家も整然と管理している。また、屋敷林の外側を縁どりする形のマキ塀も多い。屋敷林を下刈りし敷地の有効利用を図るとともに、それによって減少した防風機能をマキ塀で補ったものと考えられるが、そ

図2 大野村居合の家屋配置と屋敷囲い

注) Aは図3に示した家屋・黒の太線は生垣や塀

れだけの目的であれば、屋敷林下層の外側を生垣状に刈り上げる方法もある。したがって、これには整然さや密度の高い囲いを求める意識も働いていると考えられる。

屋敷入口はほとんど1ヶ所である。南側が道路や水田で敷地が大きい場合、屋敷入口は主屋正面南側にある。東か西に道路がある場合はほとんど道路側に入口がある。その位置は、敷地中央より南にあるものの、藤井・細田(1983)⁴⁾で指摘した、できる限り敷地の南側に寄せて、主屋正面南入口に近い形をとる意識は一般的でない。農業を生業とした住宅密度の低い列状集落では、集落内を南北に通る街道から引き込み道によって主屋正面南入口の形をとり、位置的、面積的にこの形がとれない場合には、敷地の南端に近い街道側に入口を置き、生垣やブロック塀を入口部分だけ庭に引き込んで導入部をつくり、できる限り南入口に近い形をとっていた。この場合、道路側に物置などがあるかどうかとも考慮する必要があるが、上記の違いは道路側に物置などが無い場合にも見られるものである。道路側入口を主屋近くにすることは、出入りのための空間を少なくし農作業の場として庭の有効利用を図れるが、逆に農村では屋敷入口が閉じられることはほとんどないためにプライバシーを守る立場からすれば不利な位置である。居合で入口を主屋近くにしてある家の敷地は、東西約28間、南北約14間であり、藤井・細田(1983)⁴⁾で街道側南端に入口のある敷地面積(例えば、大洋村飯島の例)と大差はない。したがって、庭の有効利用を図る必要性に大きな違いはないと考えられる。大洋村飯島では集落以外の人の通行が多い鹿

島街道に面しているのに対して、居合では道路を通るのはほとんど集落内の人である。したがって、飯島では庭の有効利用よりも主屋正面南入口指向やプライバシーを確保する意識が強く、居合では庭の有効利用を図る意識がより強いと言えるだろう。

南、東、西のいずれの入口も生垣やブロック塀を庭に一部引き込んだ形をとっている。藤井・細田(1983)⁴⁾はこれを東や西の入口を南入口に近づける代替措置のひとつであるとした。確かにそれを思わせる家もあるが、南入口や主屋近くの入口にもあることから、それだけでは説明がつかない。この導入部にはさらに2つの意味が考えられる。一つは引き込んだ生垣、塀によって道路からの視線を部分的に遮ることが可能であること。二つ目は、入口を重厚にみせることである。したがって、入口位置の決定では庭の有効利用を図るために犠牲にしたプライバシーを入口の構造によって補っている家もあるといえる。

屋敷内には、物置、倉などの他に木小屋や外便所などのある家が多い(図2, 3)。しかし、木小屋やみそ小屋などは石油、ガスの普及、消費生活の浸透によって、現在日常的には使われていない。外便所も化学肥料の普及で使われていない。物置だけは、田植えや刈取り時期に農業機械の出入りがあるほかに車庫になっていることが多く、比較的よく使われている。

庭は大きく4つの空間に区分できる。広庭、実用的植栽、装飾的植栽、人と車の出入り空間である。前述の建物がすべてよく使われていたところは広庭が庭の大半を占

図3 大野村居合の庭 A 注) 斜線部は生垣

めていたが、今日では装飾的植栽が中心である。装飾的植栽は主屋の前面から屋敷入口に至る部分に多く、ここ15年位に植えられたものが大半である。種類は、ツツジ類、イヌツツジ、モクセイ類、サザンカ、ツバキ類、そしてキクなどの草花である。主屋付近には芝がよく張られている。実用的植栽には果樹と菜園が含まれ、いずれも庭の周辺部に多い。但し、直列型の家屋配置では装飾的植栽が主屋前面の塀や生垣に沿ってあるため、実用的植栽は物置前面の塀や生垣沿いにある。果樹ではカキノキ、イチジク、ウメ、菜園にはナス、カボチャ、サツマイモ、ミョウガなどが多い。

4. 筑波町大形

集落の成立は中世といわれている(斎木・塩見・横田, 1978⁶³)。上宿、中宿、下宿というような字名からこの集落がかつて土浦から下妻や下館へぬける街道の宿場として機能していたことがわかる。しかし、現在は国道125号線が集落の横を通り、通過交通は国道に移っている。

集落は桜川の沖積地にあり、南側の水田との比高は約1m、北側の桑田、水田との比高は0.1~0.5mである(図4)。集落周囲には深さ0.5~1m、巾1~2mの堀がめぐっており、北西から南東に流れている。旧家は宝

生寺周辺の最も地盤の高い位置にあり、主屋正面南側に屋敷入口を開けている。字名はこうした土地の評価をよく表わしている。最も地盤の高い宝生寺周辺から上宿、中宿、下宿と集落中央を東西に横切る宿通りを東に下り、その北側に裏宿、南側に前堀がある。

表2、3からわかるように、現在は第2種兼業農家中心の水田地帯である。

屋敷内の建物配置は多くの場合U字型といえるが、敷地が南北に長く、東西に狭いために主屋を敷地の中央よりやや北寄りに位置させ、主屋の北側にも物置を配した家がかかなりみられる。また、藤井・細田(1983)⁴¹や前述の居合でみられた、南北、東西いずれにも余裕のある敷地のU字型配置では、物置や倉の南庭側の軒が主屋の妻側の軒の延長線と重なるか、それより後にずれて南庭を広く開ける形になっていた。しかし、ここでは東西巾が狭いためにその形はとれず、物置や倉をできる限り南に寄せ、主屋前の南庭を広く確保する形をとっている。

屋敷林は主に集落の北側に分布している。その構成は上層に15m位のケヤキ、その下に8m位のマダケである。道路側の囲いはほとんど高さ約1.8mの板塀がブロック塀であり、生垣は隣家との境界に所々みられる程度である。生垣は単一樹種から成るが、樹種はアオキ、サンゴジュ、ナンテン、マサキ、チャノキなどで多様であ

図4 筑波町大形の家屋配置と屋敷囲い

注) Aは図5に示した家屋・黒の太線は生垣や塀

る。屋敷囲いにはさらに3つの特徴がある。第1は、板塀やブロック塀の上に高さ約4mの高垣が散在することである。前述の生垣の種類が多様であったのに対して、この高垣はモチノキかカナメモチである。これは主屋や長屋門に沿って部分的にあり、特定の方位に限られたものではない。モチノキの高垣は、関東地方に広く分布し、防火や防風を目的にしたものと地元ではいわれている。屋敷囲いではないが、これと同じ目的をもつと思われる屋敷内部の高垣も数例みられる。主屋や倉の平側や妻側に沿って部分的にあり、樹種はシラカシ、イヌマキ、サングジュ、ヒイラギである。第2の特徴は、長屋門、四足門をくぐった突き当たりには高さ約2.5mの刈込みが3ヶ所みられることである。門と玄関の間に衝立てを立てた形であり、庭や家の内部が道路から見えないようになっている。樹種はモチノキ、イヌツゲであり、上記の高垣と同じくよく手入れされている。第3は、屋敷内の建物配置で述べたように東西に狭い敷地のU字型配置で主屋前の南庭を広く確保する結果、物置や倉が屋敷の南境まで押され、それらの壁面が直接道路に接する形がみられることである。これは近畿地方や瀬戸内海沿岸の平野部などにみられる囲造り（鶴藤，1966^{10）}；杉本，1969^{8）}への移行過程を思わせるものである。

屋敷入口は、上宿、裏宿、そして中宿の宿通りから北側では南と北にひとつずつあり、中宿の宿通りから南側、前堀、下宿では南か北、あるいは数少ないが東か西のい

ずれかに1ヶ所だけある。後者の北、東、西の入口はいずれも南庭につながっており、主屋へは南庭を通って入る形になっている。すなわち、玄関は南庭側にあるのである。入口が2つある場合は南側が主で（巾約2間）、北側は巾1間以下で扉で閉じているものもある。門には長屋門、四足門、冠木門、門柱だけの門の4種類がみられる。長屋門、四足門、冠木門の場合、多くは道路からわずかに奥まってあるため、道路と門の間には小さなセミパブリックスペースができています。門柱だけの門では敷地と道路が直接接する形になっているものが多い。長屋門、四足門、冠木門には扉があるが、閉められることはほとんどない。

ほとんどの庭に物置と外便所がみられる（図4）。しかし、現在物置への出入りは車庫としての利用を除けば、田植えと刈取り時期に限られているし、外便所は使われていない。庭は、居合と同様に広庭、実用的植栽、装飾的植栽、人と車の出入り空間に区分できる。これらの空間には居合と違って、敷石や飛石、生垣、竹垣などの永続的施設を伴う家が多く、空間の利用、区分が固定化されている。広庭は物置前にあり、実用的植栽は庭の周辺部、装飾的植栽は主屋前の中心部を占めている。実用的植栽にはカキノキ、ウメなどの果樹と、ミョウガやナス、サツマイモなどの畑作物が多い。装飾的植栽には、アカマツ、モッコク、ツツジ類の刈込み、カエデ類などで、居合に比べて管理に手間のかかる樹種が多い（図5）。

図5 筑波町大形の庭 A 注) 斜線部は生垣

5. 八千代町栗山

鬼怒川の西にある台地の南端近くにあり、集落の西、南、東南には小さな谷地田がある。谷地田と台地の比高は約10mである(図6)。

集落内の道路は碁盤目状であり、計画的な集落とも考えられ、一説には平将門が関係したともいわれるが明らかではない。この集落の農業、土地利用の変遷については藤井(1981)²⁾が報告している。それによると、1960年ごろまでは米麦中心の経営で、牛馬を農作業に使い、厩肥や鶏糞で肥料を自給し、平地林からは木材、燃料、肥料などを得ることによって、かなり閉鎖的な農村生態系をつくっていた。その後、1970年までは米麦に落花生、加工用トマト、キュウリ、スイカなどを加えた複合的経営で、牛馬から動力耕耘機に変わり、化学肥料が普及し

はじめた時期である。この時期に平地林の一部は開墾され、野菜畑に変わっている。さらに1970年以降になると、スイカ、ハクサイ、プリンスメロン中心の経営になり、ガス、石油の普及で平地林の燃料利用が減少し、鶏の飼育も姿を消して、動物性タンパク質は購入するようになった。農業の近代化とともに消費生活が浸透し、自給自足的な閉鎖的生態系が開放的な系に変わったといえる。現在はこの延長線上にあり、表2、3のように野菜中心の専業畑作地帯であり、農業後継者のいる安定した農村である。

集落周囲の土地利用は畑、農用林、谷地田の3つであり、図6では谷地田は南東隅に一部入り込んでいるだけである。集落の外側にまずアカマツやスギ、ヒノキの農用林が多く分布し、その外側に畑が分布する土地利用区分が読みとれる。一般に集落近くには利用頻度の高い集

図6 八千代町栗山の家屋配置と屋敷囲い

注) Aは図7に示した家屋・黒の太線は生垣や塀

約的な土地利用があり、遠くに粗放な土地利用が分布すると考えられる。藤井 (1981)²⁾ が示すようにこの地域では確かに農用林の存在は重要であったが、畑に比べると利用頻度、経済的生産性ははるかに低い。したがって、集落のすぐ外側に農用林があることには、経済的以外の要因が働いていると考えられ、井戸水の涵養や屋敷構えに対する伝統的意識 (屋敷まわりには木がなければならぬというような意識)、さらに土地所有の問題などが係わるものと思われる。

屋敷内の建物配置は、南に開いたU字型が多いが、南側に畑や屋敷林のある家では南庭の南側にも物置があり、南庭を建物でゆるく囲む形になっている。また、主屋を敷地の中央付近に置き、背後に厚みのある屋敷林をもつ家も多い (図6)。

屋敷林は、屋敷囲いというよりも屋敷林の中に宅地があるといった方が適当なほど面積が大きい。その構成はモウソウチクが最も多く、スギ、ヒノキが次に挙げられる。しかし、いずれの場合も周辺部にはケヤキ、シラカ

シが多い。林床はよく下刈りされており、シイタケ栽培などが行なわれている。

道路沿いには生垣が多く、ブロック塀は少ない。屋敷の南側に位置した生垣の多くは屋敷林を伴わず、高さ1~1.5mで道路から屋敷内はよくみえる。屋敷の東、西、北側が道路に接する場合は、屋敷林の外側に生垣が位置する形である。高さは前記のものと同様である。また、この場合は粗い四ツ目垣だけのものもみられた。さらに、敷地境界にシラカシが1列だけある厚みの薄い屋敷林では、強剪定して高垣 (下枝の上がったもの) をつくり、その下に前述の低垣をめぐるした例もある。しかし、多くの生垣は密度が低く、居合や大形とは異なっている。これには、屋敷林や農用林が多いために防風の必要性が少ないことも関係していると考えられるが、道路からの視線を遮る意識の少ないことも確かである。

屋敷入口は最底2ヶ所ある。中心的入口は主屋正面南側に多いが、敷地と道路との位置関係では南正面入口が可能であるにもかかわらず、そうしていないのも数軒み

図7 八千代町栗山の庭 A 注) 斜線部は生垣

られる。しかし、中心的入口がどれも直接南庭に通じる形になっていることは他の集落と同じである。

各屋敷に2ヶ所以上ある入口のうち最も巾の広い中心的入口の構造は、各1軒ずつある長屋門、四足門を除くと、次の3つに区分できる。第1は、屋敷林のない南入口で、生垣を庭に一部引き込んだ形はわずかである。生垣の高さが1~1.5mと低いことや主屋前にはほとんど植栽がないこともあって、この入口形態は道路と庭を連続的空間にしている。道路から庭を通過して玄関口まで、物理的、心理的にほとんど抵抗なく入ってゆけるのである。第2は、入口が東に西にある場合で、生垣を庭に引き込んで南側から庭に入る形をとっていることが多い。その位置は敷地の南端近くである。これには道路側にある物置などの位置が影響すると考えられたが、この集落では敷地が大きく、主屋と物置などとの間が十分開いているため、その間に入口をつくることも十分可能である。したがって、道路側の建物によって敷地南端にしか入口をつくれないうことではない。さらに、第1の形からこの集落には居合のようにプライバシーを確保するとか、入口を重厚にする意識が少ないと考えられる。したがって、南端近くの導入部のある入口は主屋正面南入口を指向したものと考えられる。第3は、屋敷林内を通過して南庭に出るもので、北入口に多い。これには、屋敷林内の道の両側が片側に生垣のあるものと、ないものがある。

中心的入口以外の入口は、屋敷林内や生垣の一部を通りぬけるものや、庭から直接畑に出るものなどで、巾は1間位である。

庭はどこの家も広くあいている。物置、堆肥小屋、作

業小屋、木小屋、外便所などが敷地境界近くにある、南庭を広くしている。この集落では1年を通して畑を休ませることなく使っているから、農機具の出入りは頻繁であり、物置はよく使われている。また、野菜の苗床をつくるために農用林の松葉や粗糲、鶏糞をよく使う。したがって、堆肥小屋もよく使われている。作業小屋も野菜の箱づめなどでよく利用されている。ただし、木小屋と外便所の利用はかなり減少している。石油、ガス、化学肥料の普及によるものである。藤井(1981)²²によれば約3割の家庭でフロを薪で沸かし、糞尿を肥料として使っている。麦干しなどがみられなくなった今日でも庭が広くあいているのは、このように周囲の建物への出入りが多いためである(図7)。

屋敷の中心的入口から玄関に至る付近に、コンクリートや砂利の舗装が多くみられる。大形にもみられたが、巾の狭い歩行用のもので、同時に空間区分や装飾を兼ねていた。ところが、ここでは野菜を東京の市場に出荷するトラックの出入りのためであり、巾が広く、空間区分や装飾の意図は見られない。植栽は、敷地境界にある生垣や屋敷林の近辺や建物の隅近くに植えられている。実用的植栽が中心で、装飾植栽は少ない。実用的植栽にはカキノキ、ウメ、ビワなどの果樹と、野菜の仮植などに使う耕土の部分がある。

6. 大野村 塙

この集落は、天正19年に佐竹氏に滅ぼされた鹿行33館の落武者が隠栖したのが始まりとされている。当初、屋敷は台地の端や、台地と低地の間、台地の下であり、水田耕作を中心に行っていたが、後になって井戸掘り技術な

図8 大野村 家の家屋配置と屋敷囲い

注) Aは図9に示した家屋・黒の太線は生垣や塀

ども進み、山林を開墾して畑作を多くするようになった。その結果、台地上に屋敷が移動し、現在に至っている。その間、明治年間には大小麦の耕作と養蚕が盛んになり、山林原野の開墾が盛んに行なわれた（大野村史編集委員会、1979⁵⁾）。

鹿島工業開発以降は、そこへ通勤する人たちの住宅建設が進み、山林、畑、樹園地の面積が減少してきている（藤井、1981²⁾）。表3で農家率が低いのはこの結果である。但し、図8の家の大半は農家である。しかし、畑・樹園地が減少した現在でも、その面積は水田の倍であり、畑作地帯であることは明らかである（表1）。しかし、収穫面積は稲と工芸作物が中心であり、耕地利用率も同じ畑作地帯である栗山に比べて低く、消極的経営といえる（表2）。このことは第2種兼業率の高さからもいえる（表3）。水田地帯と違って畑作は手がかかり、兼業では十分な経営はできないのである。

この集落では、栗山でみた屋敷林の外側をさらに農用林がとり囲む形の土地利用はみられない（図8）。これには、前述した明治年間の山林の開墾が関係するものと思われるが、現在までのところ資料不足で明らかではない。また、道路が不自然に曲った箇所がいくつかみられる。これは前述の落武者の敵に対する守りとも関連するものと推測できる。落武者の子孫には現在でも特異な民俗習慣さえ残っているのである。こうした歴史的背景が

家の構え、庭の使い方にも影響していると考えられるが、明らかではない。

屋敷内の建物配置は、U字型を原則としていると考えられるが、敷地の大きな家には主屋の背後にも物置などがある例もみられる（図8）。

入口を除いて四方を屋敷林で囲んだ家が多い。南側が生垣になっている図9の家も、かつてはそこに屋敷林があったという。屋敷林の厚みは水田地帯の居合に比べて厚いものが多い。屋敷林の上層(12~15m)にはケヤキ、スタジイ、スギが多く、その下層にモウソウチク、ヤブツバキが多い。

生垣は屋敷の南側、道路側に多くみられる。イヌマキの生垣が多く、高さは約2.5mであり、どの家もほぼ同じ高さである。ブロック塀も数ヶ所で見ることができ、高さはどれも約1.8mである。したがって、いずれも道路から屋敷内が見えない高さである。集落南部の道路沿いのように防風の必要性が少ない場合にも高さ2.5mの生垣があることから、この高さには防風のほかに視線を遮る意味も含まれていると考えられる。

この集落の囲いで特徴的なことは、旧家の屋敷まわりに高さ0.6~1mの土塁が巡っていることである。したがって、屋敷林の一部と生垣はその上にのっているのである。同じ形は藤井・細田（1983⁴⁾）で報告した大洋村飯島や大野村共栄でもみられた。これらは畑作集落であ

図10 大野村角折の家屋配置と屋敷囲い

注) Aは図11に示した家屋・黒
の太線は垣や塀

る。水田は現在耕地整理されて整然としているが、以前は不整形で小さな区画が一面に広がっていたことが、古い地籍図によってわかる。豊漁を考えながら手近かなところを片手間に耕していた様子が推測できる。

現在は第2種兼業農家が大半であり、主な兼業先は鹿島工業地帯と鹿島、銚子の漁業会社である(表3)。

調査を始めた当初、村役場の土地利用図(1/10,000)

を拡大して使おうとしたが、地図と現実の道路が全たく一致しなかった。その位この集落の道路は気ままである。図10は航空写真(1/6,000)と現地調査で作成したものである。道路は海から陸方向に延びたものが圧倒的に多く、海岸線に平行した道路は数本に過ぎない。こうした道路網は、鰯と塩を海から陸に引き上げることが生活の中心であったことを明確に物語っている。

整形な敷地は、集落西部を南北に通る道路の南部にみられるだけで、不整形なものが多い。

屋敷内の建物配置は、大きい敷地ではU字型で、南北に短い敷地では直列型である。また、敷地が小さく主屋だけの家も何軒かみられる。

屋敷林は、北及び東側に多くみられる。他の集落と違って樹高は3~7mと著しく低い。林内には幹の太い個体も多いことから、これは林令が若いのではなく、潮風によって上長成長が抑制された結果である。樹種はクロマツ、タブノキ、マテバシイ、マサキ、トベラ、メダケなどである。海岸に近い家では屋敷林の外側に笹垣をめぐらし砂を防いでいる。風上側には1年で1m以上もたまらしく、屋敷林の北、東側に小高い砂山ができているところも多い。図10の面積の大きい屋敷林は砂山の上にあるものである。また、図10で幅のせまい屋敷林は刈込んでいない生垣とも言うもので、クロマツ、マサキ、トベラ、メダケが密生しており、高さも巾も不整いなものである。

生垣として刈込んだものにはマサキ、イヌマキが多く使われている。しかし、量的にはわずかで、ブロック塀の方がはるかに多い。いずれも高さは1.5~1.8m位で多様である。ブロック塀は比較的新しく、以前は現在も所々に残っている笹垣が多かったようである。

したがって、この集落の屋敷囲いは屋敷林、刈込んでいない生垣、生垣、ブロック塀、笹垣と種類が多様であり、高さも不整である。また、ここでは囲いが四方全部にない屋敷や一方がないもの、部分的に欠けたものなどが多い。

屋敷入口はほとんどの家で2ヶ所以上ある。ブロック塀の場合は入口が明確であるが、その他は、南側の囲いが隅の方に一部あるだけで巾広い入口になっている家や、北側以外に囲いがなくどこからでも入れる家などもあり、他の集落のような明確さはない。道路が敷地の南側にある場合、中心的入口は主屋正面南側にあり、道路が北側にある場合も南側の道路(敷地と接していない)から細道を引いて同じ形をとっている家が多い。道路が東か西の場合は道路側に入口を開いている。

中心的入口の構造は、南側に囲いがなくどこからでも入れるものから、導入部をもった入口まで多様である。全体として構えは感じられず、道路と庭との物理的、心理的境界は少ない。

図11 大野村角折の庭A 注) 斜線部は生垣

庭は形態的に大きく3タイプに区分できる。第1は、U字型、直列型、主屋のみのいずれの建物配置にもみられ、南庭が広庭になっており、植栽は庭の周辺や建物近くにわずかにみられるものである。居合の直列型建物配置や栗山の庭と類似している。第2は、U字型の建物配置にみられ、主屋前面に島状の装飾的植栽があるものである。植栽されたばかりのものが多く、第1のタイプの変化と考えられる。第3は、U字型の西側の建物が欠けた建物配置と主屋のみの家にみられ、庭の南西から西側に菜園(庭木に変わった例もある)があるものである。庭に菜園のある例は他の集落にもみられたが、これは主屋の南西側近くにあるところに特徴がある。しかも、図11のような生垣の区切りが多くみられる。生垣や石垣で南庭の一角を菜園として明確に区分した例は沖縄や対馬にもみられ、西南日本、特に海岸地帯との関連を予想させるものである。

いずれのタイプの庭でも、水田地帯、畑作地帯でみられたカキノキはみられなかった。

8. 結 論

1) 建物配置、庭、敷地の形態

各家独自の判断が原則的には大きく影響すると考えられる屋敷内の建物配置と庭についてまとめてみると次の

ようである。

建物配置には次の7タイプがみられたが、U字型配置が最も多く一般的であった。これらは敷地面積や隣接の

1. U字型配置の南側にもうひとつ物置きなどを置いて南庭をゆるく囲む形(栗山の例)
2. U字型配置の主屋の北側にさらに物置などを置いた形(大形の例)
3. 主屋を北側中央部に寄せ、南東、南西に物置や倉などを置いたU字型配置
4. 東か西に道路があり、その道路側に入口を開いているために、U字型配置の道路側の建物を南にまわし、道路側に開いたU字型にしたもの(居合の例)
5. U字型配置の一方を欠いた形(角折の例など)
6. 東か西に道路があり、道路近くに主屋が位置し、その横に順次物置などが並ぶ直列型(居合、角折の例)
7. 主屋のみの形(角折の例など)

土地利用に規定されており、これらの条件が同じ場合はどの家もほぼ同じ配置をとると考えられ、個性的配置は少ないのである。また、上記のタイプが生業の違いを反映するとは考えられない。但し、集落におけるそれらの割合が生業の違いによって異なる可能性はある。この

点については現在進めている計量的調査の結果をまとめて検討したい。

庭は、広庭、実用的植栽、装飾的植栽、出入り空間の4つに区分できる。居合、大形ともに装飾的植栽が中心であるが、大形には敷石や飛石、生垣、竹垣などの固定施設が多いのに対して、居合には少なかった。栗山、塙では広庭が中心であったが、装飾的植栽は塙の方が多かった。水田集落に装飾的植栽が多いのは、早くから省力化、兼業化が進み、農作業空間としての庭の役割が減り、生活空間としての意味が大きくなった結果であり、一方畑作集落に広庭が多いのは、現在でも農作業空間として使われていることや、畑作には人手がかかり庭木などをいじる時間的余裕がないことが直接的理由と考えられる。しかし、これら直接的理由の背後には、水田、畑作集落における庭に対する意識の違いも予想できる。この点は庭の構造的調査によって検討する予定である。

いずれにしても上記4集落では集落ごとに庭の形態が類似しているのに対して、角折では多様であって集落全体としての特徴は明らかでなかった。したがって、本来多様であっていいはずの庭も、角折を除けば、その構成は集落ごとにかなり類似していることがわかる。

屋敷内の建物配置と庭の構成でみられた集落間、及び集落内の類似性は、隣近所と歩調を合わせようとする意識が私的空間にも及んでいることを示すものである。

他の家との競合や協力の中で決まる敷地や道の形態はもちろん、屋敷囲い、屋敷入口の位置や構造は、上記の建物配置や庭よりさらに色濃く集落の心理・社会的性格を反映するものと考えられる。

居合、大形、栗山、塙の敷地は、境界が明確であり、ほとんど整形であった。これに対して、角折では境界が不明確で不整形な敷地が多い。道路も、海岸線に直角に延びた道路以外は路線、巾ともに極めて恣意的である。同じことは耕地についても言える。角折の水田区画は平坦地にあるにもかかわらず極めて不規則であった。したがって、角折では敷地、道路、耕地は総じて恣意的であり、計画性を欠いている。水田地帯や畑作地帯では、生活の糧を限られた土地から永続的に得なければならない。境界のわずかな凹凸も長年すると大きな収穫の差となって表われてくる。これに対して、海岸集落では海に生活の中心があり、土地への執着は少ないものと考えられる。さらに注目すべきことは、角折では昭和初期に鰯漁と製塩が衰微し、その後1961年の鹿島工業開発まで細々とした漁業が続いたと想定しても、海から離れてすでに20年以上も経っているのである。これは、空間意識の安定性を示す事実である。

2) 屋敷囲いと屋敷入口

いずれの集落にも屋敷には何らかの囲いがあった。これは、北海道やアメリカ合衆国などでみられる囲いの少

ない農家とは対照的である。アメリカ合衆国で囲いが少ないのは、道路から玄関まで距離があるために視線や話し声の干渉を避けられるという物理的要因の他に、生垣の中に閉じ込められるのを嫌うとか、囲いは紳士気どりとみられる、公衆の目を遮るために危険である、という心理・社会的要因も係わるようである(Schmid, 1975⁷⁾)。囲いの存在そのものの意味については、建物の構造、生活様式、自然条件などを考慮しながら、囲いのない地域との比較が必要であり、稿を改めて検討することとし、ここでは囲いの細かな違いの意味について、各集落での結果と考察を総括する。

屋敷林は、大形や角折のように居住密度の高い集落には少ない。その主な理由は、屋敷林は日陰や落葉など近隣にも影響が及ぶため敷地に余裕がなければならないことである。屋敷林と立地条件や生業との関係は、居住密度の低い居合、栗山、塙で比較する方が容易である。栗山、塙の屋敷林は居合に比べて厚みがあり、面積も大きい。塙は畑の中、居合は水田の中に孤立しており、防風の必要性に差はないと考えられる。栗山は屋敷林の外側に農用林があるために屋敷林の防風上の必要性は上記の2集落よりむしろ少ないと言える。したがって、屋敷林の厚み、面積の違いには、土地利用における集約度の差が反映しているものと考えられる。居合の敷地は水田の中に盛土してつくったものであるから、敷地の有効利用を図るために防風機能を満たした最小限の屋敷林をつくる意識があるのであろう。これに対して、栗山、塙では屋敷林で井戸水を涵養する意識はあるものの、水田地帯ほど集約化されていない畑作地帯の粗放な土地利用意識が強く関係していると考えられる。

以下で述べる生垣、塙の形態、屋敷入口の数や位置、形態は相互に密接な関係をもつので、それらについて集落ごとの結果をまとめたのち、一括して考察を加えたい。

居合ではイヌマキの生垣(高さ約2m)とブロック塙(高さ約1.8m)、大形では板塙、ブロック塙(ともに高さ約2.5m)、塙ではイヌマキの生垣(高さ約2.5m)、ブロック塙(高さ約1.8m)が多いというように、これらの集落では垣や塙の種類、高さが比較的均一であった。これらに対して角折では、刈込んでいない生垣、生垣、笹垣、ブロック塙と種類が多く、高さも1.5~1.8mと多様であった。また、栗山ではマサキの生垣が多く種類は均一であるが、高さは1.0~1.5mと様々であって、居合、大形、塙と角折との中間とも考えられる。塙はかつて水田中心であり、現在も稲作の比重が比較的大きいことを考えれば、水田集落の垣、塙は集落内で均一であると言える。

道路を通行する人の視点の高さを1.5m前後とすれば居合、大形、塙の生垣、塙は視点以上であり、しかも整然とした密な囲いであって、閉鎖的な囲いである。これ

に対して栗山では、視点より低く、粗く疎らな開いであり開放的であった。角折も、視点より高いものもあるものの集落全体としては開放的である。

また、居合と栗山には屋敷林の外側に生垣のある家があったが、それらの形態には大きな違いがあった。居合では、厚みの薄い屋敷林を高さ約2mのイヌマキの密な生垣がとり囲んでおり、敷地の有効利用や視覚的整然さ、密な屋敷開いを求めたものと考えられたが、栗山では厚みのある屋敷林の外側に高さ1.0~1.5mのマサキの疎らな生垣があり、屋敷内への踏み込みを防ぐほどの開放的なものであった。

屋敷入口については集落ごとに細かな違いがあったが、中心的入口が直接南庭に通じている点では共通していた。その入口から玄関に到るアプローチは、主屋玄関が南側にあるために南庭を通り抜ける形なのである。また、その位置は主屋正面南側が原則と考えられ、南入口以外を志向したと考えられる江戸の大名屋敷（東京のまち研究会、1980）⁹⁾ などとは対照的である。主屋正面南入口は、玄関とともに、生業の場である南庭に入口を結びつける必要のある農家の庭の特徴である（藤井・細田、1983）⁴⁾。

また、いずれの集落でも屋敷の中心的入口はたえず開いている。これは直接的には農作業の便利を考えてのことだろうが、心理・社会的意味も大きいと思われる。例えば、大形のように明らかに門外からの視線を遮る意識がありながら、扉を閉めずに庭の刈込みを衝立てとしていた。入口を閉じることは地域社会に対する鎖閉を意味するために、刈込みによって柔らかに視線を遮ったものと言える。したがって、入口が絶えず開いているということは、集落内に基本的な共通理解、暗黙の了解があることを示すものと考えられる。これは、日常的に入口が閉じていることの多い都市住宅との大きな違いである。

さて、屋敷入口に関する集落間の違いについてまとめてみたい。まずその数では、居合で1つ、大形で1つか2つ、栗山、塙、角折で2つ以上であった。入口がいくつかある場合、公道につながる中心的入口の他には耕地や隣家に通じるものなどがある。隣家との間を結ぶ道はとくに家みちと呼ばれている。居合と大形には家みちはみられなかった。したがって、水田集落では個々の家が孤立的、閉鎖的であるといえる。

敷地面積や南隣の土地利用との関係で中心的入口を主屋正面南側にとれず、東か西の道路側に入口がくる場合、その位置は敷地の北端から南端まで可能であるが、調査集落では主屋南側の軒より南にあった。その位置決定には道路側にある物置などの建物が関係するが、調査集落ではそれらがあっても敷地が大きいために主屋近くにも、敷地南端にも入口を開くことができた。したがって、入口位置決定には次の3要因が係わるものと考えら

れた。1) 主屋正面南入口指向：藤井・細田（1983）⁴⁾のように農家に主屋正面南入口指向があれば、東か西の入口を南端に置くことで南入口に近づけられる。2) プライバシー確保：主屋近くのプライバシーを守ろうとすれば、入口は南端にした方が有利である。3) 出入りに割ける庭の面積：入口を主屋近くにすれば、出入り空間を少なくし農作業や生産に使える空間を大きくできる。3) では敷地面積が大きく影響するが、この形の入口がみられた居合、栗山、塙の家はいずれも約400坪（約1300㎡）で大差なかった。角折にもこの形の入口があるが、敷地の南北巾が狭く位置選択の余地はなかった。

居合では入口は主屋近くにあり、1)、2)より3)を重視し、反対に栗山と塙では南寄りにあり、栗山では、3)より1)を、塙では3)より1)、2)を重視していると考えられた。栗山で2)が除かれているのは、生垣の高さが視点以下であることなどから、2)の意識が低いと考えたためである。したがって、居合では栗山、塙より庭を有効利用する意識が強いと考えられる。これは屋敷林でみた傾向と同じである。

屋敷入口の導入部には次の3つの意識が係わるものとする。1) 主屋正面南入口指向：東か西の入口では生垣や塀を一部引き込んだ導入部によって南入口に近づけられる。2) プライバシー確保：導入部の生垣や塀によって、道路からの視線を遮った空間をより広くできる。3) 重厚さの付加：導入部によって厚みのある奥深い入口ができる。

導入部は中心的入口が東か西の場合に多いが、居合では南入口にも多くみられることから、1)、2)、3)の意識が混在していると考えられる。これに対して栗山、塙では門柱も少なく、南入口に導入部もほとんどないことから、入口を重厚にしたり門を構えたりする意識は少なく、1)と2)の意識が中心と考えられる。但し、栗山では既述のように生垣が低く、2)は少ないであろう。以上のことから、居合は栗山、塙より門を構える意識が強いと考えられる。一般的に長屋門や四足門のような格式ばった門構えが水田地帯に多いことを考え合わせると、門を構える意識は水田地帯の特徴といえる。

また、居合、塙は栗山に比べて屋敷のプライバシーを守る意識が強いといえる。これは前述の生垣、塀の傾向と同じである。塙は、耕地に占める畑の割合が大きいものの、収穫面積では水稻が半分を占めていることや歴史的に水田起源であることなどから、水田地帯と類似した傾向をもつのであると考えれば、水田地帯は畑作地帯に比べて閉鎖的であるといえる。

水田、畑作、海岸集落で生垣、塀の形態、屋敷入口の数、位置、形態などが異なる理由を明らかにするには、さらに詳細な分析と他の集落での検証を必要とするが、ここでは生産様式が反映しているという考えを提起したい。

海岸集落が水田、畑作集落とは著しく異なった特徴を持っているのは、すでに述べたように海に生業の場があるために土地への執着が少なく、ということが根本的理由であると考えられる。

水田集落と畑作集落の違いについては次のように考える。屋敷面積や家屋のつくりから家格や社会的地位を推察できることは、水田集落も畑作集落も同じである。それを門構えて明示しているところに水田集落の特徴がある。門構えのタイプとその割合は集落の階層構造を示すといっても大きな誤ちはないだろう。稲作は水系を中心にしており、水の制御と利用には集団の労働と組織的連携が必要であった。また、田植えや刈取りなども集団で行なわれることが多かった。しかも、これらの稲作技術は早くから確立されていたため、水田集落では生産と組織の維持が中心的課題となった時期がかなり早かったものと考えられる。生産組織を維持する方法のひとつとして、集落の階層構造の固定化が考えられる。それには各戸の社会的地位を明確化し、地域の付合いにハイラーキー構造が適用される必要がある。門構えは、この社会的地位の明確化、固定化の一方法と考えられる。したがって、水田地帯では形式的付合いやたてまが多くなりがちであり、本音が後に追いやられる傾向があると考えられる。これが閉鎖的な屋敷囲いとなって表われるのであろう。稲作とそれに必要な水管理における集団の労働と組織的連携はまた、何事につけても集落内で歩調を合わせようとする意識を生み、この意識が、種類や高さの均一な生垣、塀となって表われるものと考えられる。

これに対して畑作地帯では、河川への依存度は低く、収量は耕耘、施肥、除草という個人的努力に大きく依存している。また、作物生産技術も稲作に比べて遅れていた。生産活動は個人的であり、また稲作ほど恒常的ではないのである。したがって、他の家に対する関心は低く、門構えなどによって社会的地位を明示したり、屋敷囲いを閉鎖的にする必要性は低いと考える。

9. お わ り に

水田地帯、畑作地帯、海岸地帯という異なった立地条件、生業をもつ集落の外部空間を比較し、農村空間の地域特性を心理・社会的側面から考察した。この種の比較

は前例がないために、第1段階として定性的比較を試みた。しかし、無数とも言える農村集落のわずかな集落を調べたに過ぎないわけで、ここで得た結論がさらに検討を要するものであることは言うまでもない。

調査過程では、千葉大学の齊藤一雄教授、浅野二郎教授、安藤俊比古講師、筑波大学の糸賀 黎助教授から多くの助言を得た。まとめの段階ではニューヨーク州立大学 Norman A. Richards 博士、James F. Palmer 博士との議論が有益であった。これはウエアハウザー財団在外研究助成（国際文化会館）のおかげである。また、この研究の一部は文部省科学研究費、日産学術振興財団の援助を受けている。厚くお礼申し上げる。

引 用 文 献

- 1) 藤井英二郎・柴田 拓：マツ平地林の林床植生の地域特性に関する研究，日林誌63，305—310，1981
- 2) ————：マツ平地林の緑地的評価の地域特性に関する研究，千葉大園学報29，65—144，1981
- 3) ————：農村空間の構造と特性に関する研究Ⅲ—茨城県の塊村の場合，昭57造園学会（春）発表要旨，105—106，1982
- 4) ————・細田和寿：農村空間の構造と特性に関する研究—列状集落の都市化に伴う変化，千葉大園学報31，73—80，1983
- 5) 大野村史編纂委員会：大野村史，89—107，大野村教育委員会，1979
- 6) 斎木崇人・塩見 寛・横田 望：集落形態とその居住環境による類型化の研究，住宅建築研究所報，228，1978
- 7) Schmid, James A. : Urban Vegetation, 266 pp, Univ. of Chicago, 1975
- 8) 杉本尚次：日本民家の研究，302 pp，ミネルヴァ書房，1969
- 9) 東京のまち研究会：東京のまちを読む—都市・建築の構成原理に関する史的考察，106—118，法政大，1980
- 10) 鶴藤鹿忠：四国地方の民家，239—254，明玄書房，1968

(1983. 2. 25受付，1984. 1. 28受理)

Summary : Two lowland settlements, two upland settlements, and one seaside settlement are investigated to clarify regional characteristics of rural spaces. The lowland and upland settlements mostly engage in paddy field farming and field farming respectively. The seaside settlement had engaged in a fishery until 20 years ago, but today secondary industrial workers are dominant. Irregularly shaped homesites, roughly managed hedges, and whimsy roads and trails are common only in the seaside settlement, despite its dense population. These characteristics mean that the local people show less care for the land even today because their major concerns had been the sea. There are seven patterns of homestead; the most abundant is U-shaped

pattern, in which a house is at the the bottom and U is open to the south. Every pattern has a largely open south yard. Almost all homesites are enclosed by woodlots, hedges, or fences. Most entries to homesites are always open even if they have a door. Main entry is generally located at the south of homesite, and every main entry connects with a south yard. These are characteristics of entries in the rural areas. When a main entry is at the east or west side of the homesite, the location within that side is very important to the residents. If it is at the southern part, they can get a similar situation to south entrance, and also the advantage of privacy of the yard. Conversely, entry pass near the house they can get a large space for working because an entry pass is shorter and doesn't divide the south yard. Entry pass bordered by a hedge or fence for the first few meters has three meanings, such as to make the east or west side entry similar to a south side one, to cut off some views from an entry to keep privacy of a yard, and to make an entry massive. Comparing a location and structure of entries from these points of view and also the height and type of hedge or fence among settlements, the lowland settlements have closer and more standardized enclosure and more formal entry than other settlements. The homogeneity within the settlement is considered a consequence of desire to be similar to others and of a co-operative working system of paddy field farming. Close enclosure and formal entry are considered as a reflection of formal community based on a stable and mature paddy field farming system. Another regional characteristic is that in the upland settlements many farm yards are still open as agricultural working spaces. Conversely, ornamental plantings dominate the yard in the lowland settlements because the popularization of combine and grain-dryer have decreased the agricultural usage of yards.